

空間あい サロンコンサートⅧ ～あなたに愛と調和と芸術を～

ARTS for the future! ▶2
コロナ禍を乗り越えて



高崎芸術劇場初登場

モルゴーア・クアルテット

明日のボーダレスを目指す日本最高峰の弦楽四重奏団

2022年9月3日(土)19:00開演(18:30開場)

高崎芸術劇場 音楽ホール

第1ヴァイオリン 荒井英治(元東京フィルハーモニー交響楽団ソロコンサートマスター)
第2ヴァイオリン 戸澤哲夫(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)
ヴィオラ 小野富士(元NHK交響楽団次席ヴィオラ奏者)
チェロ 藤森亮一(NHK交響楽団首席チェロ奏者)

主催:株式会社 空間あい 後援:上毛新聞社 群馬テレビ、FM GUNMA ラジオ高崎

Program

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第4番 ハ短調 Op.18-4

- 第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント
- 第2楽章 スケルツォ アンダンテ・スケルツォーソ・クアジ・アレグレット
- 第3楽章 メヌエット アレグレット
- 第4楽章 アレグロ

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第8番 ハ短調 Op.110

- 第1楽章 ラルゴ
- 第2楽章 アレグロ・モルト
- 第3楽章 アレグレット
- 第4楽章 ラルゴ
- 第5楽章 ラルゴ

——— 休憩 (20分) ———

狭間美帆：キメラ

ELP：タルカス

K.クリムゾン：21世紀のスキッツォイド・マン

Program Note 曲目解説

小崎 紘一

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第4番 ハ短調 Op.18-4

音楽評論家の井上太郎が「弦楽器だけで編成された交響曲」と呼んだように、3つの楽器と4人の奏者によって奏でられる弦楽四重奏は、その小さな編成でオーケストラに匹敵する豊かな表現を内包しているジャンルであると言える。基本的な楽章構成が交響曲と共通しており、明確な起承転結によるドラマ性がある。バロック時代から複数の弦楽器による室内楽は種々書かれてきたが、こうした様式を徹底させ、楽譜を出版する際に「弦楽四重奏曲」という名称で統一させたのが、ウィーン古典派の巨匠、ハイドンだった。続くモーツァルトはハイドンの弦楽四重奏曲集「ロシア・セット」に触発され、通称「ハイドン・セット」と呼ばれる6曲の弦楽四重奏曲を書き上げた。そして、その「ハイドン・セット」のスコアを写譜しこのジャンルへの考察を深めたベートーヴェンが作曲したのが本作を含む6曲の弦楽四重奏曲(作品18)であった。

作曲当時のベートーヴェンは28歳。ウィーンに拠点を移して10年は経っていなかったが、既にトップ・ピアニストとしての名声を得ており、同時期には初期の傑作ピアノソナタ「悲愴」を完成させている。弦楽四重奏曲というジャンルは彼にとって畏怖を抱かせるものであり、先に述べたように着手するに当たり慎重を期した。完成した後も改訂を重ね、出版されたのは30歳を過ぎた後であった。本作は6曲中最後に書かれている。のちのベートーヴェンのカタログを知る側からすると、第1楽章、ハ短調によるドラマティックなオープニングは「運命」交響曲のそれを、第2楽章から第3楽章にかけてのスケルツォ〜メヌエットという流れは交響曲第8番の同様の楽章構成を想起させたりと興味深い。青春的な早急さで最終楽章のロンドが終わる。先達たちの洗練された筆運びを追いかけつつ、そこかしこに表れる人間臭さにベートーヴェンらしさを感じる名作。

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第8番 ハ短調 Op.110

ソビエト連邦時代の作曲家、ショスタコーヴィチ。20世紀のクラシック界を代表する巨星であり、特に交響曲と弦楽四重奏曲の分野ではベートーヴェンに比肩するほどの作品群を遺した。デビュー当時から紛れもない天才性を証明してみせたが、芸術作品への直接的な政治介入が日常的に起こっていたのが、当時のスターリン政権下のソビエトであった。特に交響曲やオペラといった大多数の聴衆向けの作品にそれは顕著で、体制を礼賛する作品と捉えられたショスタコーヴィチの作品は、批判の的にもなった。

だが、没後出版された回想録「ショスタコーヴィチの証言」において彼が受けた抑圧とそれに対する芸術家としての本心が明か

されたことで、政治に迎合した作曲家というある種のレッテルは剥がすことができた。特に、弦楽四重奏曲のような小編成の室内楽は政府の目を気にせずに心情を吐露できるジャンルだったことが明かされた。

静謐、ドラマ性、緊迫と、ショスタコヴィチの音楽のシグネチャーとも言える楽想に満ちた本作は、自身の代表作に留まらず、20世紀を代表する同ジャンルの傑作として親しまれている。1960年、57歳の頃に書かれた。アルファベットによる自身の名前【Dmitry Shostakovich】の頭文字「D. Sch.」をドイツ音名に置き換えたDSCH音型(レ-ミ-ド-シ)が主題として用いられているのが大きな特徴。ソビエト軍の活躍を描いた映画「ドレスデンの五日間」の劇伴の依頼を受けたショスタコヴィチは、取材で訪れた現地で凄惨な戦禍を目の当たりにする。「ファシズムと戦争の犠牲者の思い出に」と題して発表した本作であるが、自身の精神的疲弊をそこに重ね合わせていたのはこの音型が採用されたことから明らかであった。

狭間美帆：キメラ

狭間美帆(1986-、東京)は、ジャズを軸にクラシックや吹奏楽など様々な方面から注目を集める、現在の我が国を代表する作曲家のひとり。国立音大でクラシックや現代音楽を、マンハッタン音楽院でジャズの研鑽を積み、デビューCD「ジャーニー・トゥ・ジャーニー」のリリースと、山下洋輔プロデュースの東京オペラシティ・ニュー・イヤーズコンサートで鮮烈なデビューを飾った。この「キメラ」は2015年にモルゴアの委嘱により制作された弦楽四重奏曲。Just Composed 2015 in Yokohamaにて初演された。狭間曰く、モルゴアのメンバー4人の音を想定して、“グルーヴ”というキーワードを念頭に作曲された。弦が弾けるような力強いアンサンブル、極細から極太に至る四本のレイヤーが交差し、協奏する様はまさにモルゴアの的と言える。クラシックのフォーマット(弦楽四重奏)でジャズとロックを響かせる音像もプログレッシブロックを想起させる。

プログレッシブロックについて

1960年代、ポピュラーミュージックが「芸術」として認知されるには大きなインパクトが求められた。毎週目まぐるしく変わるヒットチャート、ラジオとテレビから変えず流れてくる3分間の流行歌。ボブ・ディラン、ビートルズ、ビーチ・ボーイズ、ローリング・ストーンズと伝説的なミュージシャンが群雄割拠していた只中であっても、クラシックとは次元の違うスピードで増えていく音楽を正しく捉えて論じることは難しかったし、批評の対象たり得ないと見做されていた時代である。

1967年、ビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」が世間の目をロックに向けさせた。今聴くとロックアルバムとしても、ビートルズの作品としても決して最高傑作とは言えない作品だが、ロックを芸術のいちジャンルとして認めさせたという意味で歴史的な作品である。そこで表現されていたのは、一言で言えば批評であった。ロックについて、ポップ・ミュージックについて、そして自身について。ただ、流行の移り変わりが激しいロックは過去を考察して常に最新のモデルを提示するという性格が備わっており、その意味でロックとは本来批評的な表現であった。

この部分をより深いレベルで追求しようとしたのが、プログレッシブロックであった。厳しい現状認識、冷静な自己批評、個人と社会の関わりといったテーマを緻密なアンサンブルと激しい演奏で描き出していったプログレは、これまでの流行歌にはなかった、人生を鑑みる重要な音楽として若い聴衆の圧倒的な支持を得た。このジャンルの旗手であるキング・クリムゾンが1969年にデビューすると、プログレッシブロックは70年代前半の音楽マーケットを席卷していった。

ELP：タルカス

キース・エマーソン(キーボード)、グレッグ・レイク(ヴォーカル&ベース)、カール・パーマー(ドラム)という当時のロックシーンを代表するミュージシャンによって結成されたエマーソン、レイク&パーマー。個々の活動で名声を得ていた名手たちが一堂に会したことから“スーパー・グループ”とも呼ばれた。事実、無駄を削ぎ落とした編成と卓越した演奏によって表現されるグルーヴは数多のロックバンドのそれとは一線を画していた。

キース・エマーソンはジャズ、クラシック、ブギウギとあらゆるジャンルを横断する鍵盤楽器の名手であり、当時徐々に使われ始めたシンセサイザーの表現を押し広げたという意味でも特筆すべきプレイヤーである。エマーソンを中心としてコンセプトが練られた1971年の「タルカス」は、ELPのバンドとしての真価を世に示した1枚となった。空想の怪物タルカス(戦車とアルマジロが融合した姿がアルバムジャケットに描かれている)による破壊と再生というストーリーがLP片面を費やして描かれた。キング・クリムゾンの場合、ロバート・フリップのコンセプトを具現化するためのサウンドデザインであったが、ELPの場合は3人のサウンドデザインを存分に表現するに見合う大仰なコンセプトが求められていた。

K.クリムゾン：21世紀のスキッツォイド・マン

1969年、ビートルズ最期のレコーディングとなった「アビー・ロード」に代わってチャートの首位を獲得したのが、本作が収録されたキング・クリムゾンのデビュー作「クリムゾン・キングの宮殿」である。特に、ギターのリバート・フリップによる完璧なサウンドデザインと作品ごとのコンセプトが放つインパクトは大きかった。ジャズや現代音楽の領域にも足を踏み入れつつ、ヘヴィなギターサウンドと叫び声から吐き出される混沌と恐怖に満ちた歌詞はこれまでのロックにはない、新しい表現として熱狂的に受け入れられた。

高崎芸術劇場はしご旅

9月3日、19時開演、高崎芸術劇場、音楽ホールでプログレッシブ・ロックを楽しむ。しかしながら、第581回群響定期と重なり、ソワレの19時に開演としたが、高崎まつり花火大会と重なってしまった。13時30分の開演にすれば、モルゴア・クアルテット、群響定期、そして花火大会と贅沢なハシゴができたと思う。会場が群馬音楽センターだったら、プログレッシブ・ロック、花火の音や救急車のサイレンも聞こえて楽しめかもしれない。

7月6日、コロナ禍の中、ロンドンへ、帰路ウィーンに立ち寄った。かねてから気がかりだった、群馬交響楽団永久名誉指揮者マルティン・トゥルノフスキー氏の墓前で手を合わせた。ロンドン、ウィーンでは、マスクをしている人は見わたらず、コロナ禍など感じることはなかった。

マルティン・トゥルノフスキーを偲ぶ。

コロナ禍で多くの方々が天国に逝った。ある少女が昭和30年代に高崎で誕生し、東京で育った。少女の母は、ここ群馬の高崎で育ち、幼いころ群響の移動音楽教室の出来事を少女によく語った。少女はやがて音楽の道に芽生え、若くしてヨーロッパに留学した。そこで知り合った音楽家と結婚すると時に少女の母は、天国に召された。少女は、祖国日本を離れてもうヨーロッパでの生活は長い。その少女の義父がマルティン・トゥルノフスキーである。少女は、義父が、群馬交響楽団の首席客演指揮者となり、群馬音楽センターでの群響定期演奏会の様子を亡き母に伝え、母の喜ぶ姿を思い出した。

私は、群響事務局時代にマエストロとは、演奏会の企画内容など、ごく限られた内容で、個人的な出来事について話すことはなかった。高崎での最期の会話から、十年ほど過ぎる中で、心に残っている言葉がある。夫妻が「高崎は、私たちにとって祖国である」と。マエストロは、ユダヤ人の弁護士を父に、ドイツ人音楽家を母に、1928年プラハで生まれ、恵まれた家庭で育った。1940年代、台頭したナチスがボヘミア地方に侵攻した暗黒時代に、十代の青春を、プラハから北50キロのほどナチスの収容所テレジンシュタットで過ごすことになる。そこでは、多くの音楽家が作品をのこし、やがてアウシュビッツに移送され命をたたれた。ナチスのプロパガンダによる非人道的な策略の中で、音楽の探求に没頭して「音楽」が人々に、そして自分自身に喜びを与えることを全身で感じていたのか、まさに奇跡だ。そこでの生活についてマエストロは、私に話すことはなかったが、チェコの名指揮者コシユラーとそこで知り合い、その後二人はプラハアカデミーで学んだ、そして当時毎年テレジンで追悼演奏会をしているとのことだった。二人の師匠であるアンチェルや群響をプラハの春国際音楽祭に招聘した音楽祭委員長、作曲家のペトル・エベンもテレジンで過ごしている。

その後チェコがナチス・ドイツの支配から解放され、共産党政権が樹立、ソ連の衛星国化に反発して、クーベリックは亡命し、また1968年にいわゆるチェコ事件が起こり、アンチェルは、演奏旅行中のアメリカで亡命し、そしてマルティンは、ドレスデン音楽監督を辞して、家族を伴って、オーストリアに亡命した。1989年に母国チェコが民主化されて、亡命以前の契約を果たして、プラハ交響楽団の首席指揮者に就任している。

マエストロは、2013年10月に群馬交響楽団定期でスメタナ「わが祖国」全曲を指揮する予定だったが、体調不良により来日できず、ヨーロッパでのコロナ禍で中、妻のズデンカが2021年2月27日、そしてマエストロが5月19日に天国へ召された。彼らにとって複雑な想いの中、祖国とは何だったのか。コロナ禍を乗り越えて、夜明けを信じて、合掌。



ウィーン郊外、ガーデン